

松 山 大 学 論 集
第 24 卷 第 1 号 抜 刷
2 0 1 2 年 4 月 発 行

対面的コミュニケーションについての考察（I）

—— 竹内レッシン：体験と省察に基づいて ——

国 崎 敬 一

対面的コミュニケーションについての考察（Ⅰ）

—— 竹内レッスン：体験と省察に基づいて ——

国 崎 敬 一

序 言

近年私は、対面的コミュニケーション、広くいえば〈自己・他者・コミュニケーション〉の研究を進めてきた。私は、私なりに事情ときっかけがあって、竹内レッスン（正確に言えば、「からだとことばのレッスン」）に参加した。そのときの体験がまさに、対面的コミュニケーション（広くいえば〈自己・他者・コミュニケーション〉）の実体験・実験であった。その体験を振り返って考察する、換言すれば、省察すると、対面的コミュニケーションについて、驚くべきことがみえてきた。広いテーマ〈自己・他者・コミュニケーション〉について思索が深まったのである。この体験と省察をもとに、2009年度課題のテーマ〈自己・他者・コミュニケーション〉の論文として、書いてみたいと思う。

0 「体験と省察」執筆の事情ときっかけ

数年前、私は竹内敏晴さんの「からだとことばのレッスン」（「竹内レッスン」）に初めて参加しました。そのときの「出会いのレッスン」で私は驚くべき体験をしました。不思議な体験と言ってもいいかもしれません。そして、それはその後の私の生と人格を大きく変容させはじめました。いい方向へです。その体験をその後のレッスンの懇親会などで何度か話しました。多くの方が興味深く聴いて下さったようです。竹内さんも興味をもたれたのか、昨秋電話がかかってきまして、よかったら文章にして送ってくださると依頼されました。

私自身、現在の研究テーマ（対面コミュニケーション、広くいえば自己・他者・コミュニケーション）の研究とも関係のある体験でもあり、これは書き記しておきたいと思っていたところへ、竹内さんからの依頼があったので、早速執筆に取りかかりました。書いていると、私という存在を形づくってきた人生のエピソードが次々と思い出され、思わず思索が深まるということもあって、思いのほか日にちが過ぎてしまいました。ようやくなんとか書き上げました。

ここには、そのとき私が体験したこと、そこで起きたことを、できるかぎり正確に記述することにしました。ただ、出会いのレッスンの終了後に大事なところをメモに残しただけで、多くは記憶をたどって書きましたので、ビデオテープで撮ったような正確な記述はできませんでした。ただ出会いのレッスンの体験で重要な場面は印象が強烈ですから、記憶は確かだと思われま

す。「からだことばのレッスン」をあまりご存じない方のために、はじめにレッスンの簡単な紹介を載せ、体験記の中でも説明が要るような箇所には説明を付けました。さらに、体験を書き記しておりますと、これは一体どういうことだろうと気になるところが出てきます。そこについて私なりに考えたものを、参考までに考察として添えています。

なお、できるかぎり正確に記述しようとしたため、やや堅苦しくごちない表現になっているところがありますが（*）、その点ご寛恕^{かんじょ}いただければ幸いです。また、この中に登場される方々のプライバシーに配慮して、具体的に日時・場所・人物を特定できるような表現はとらないようにしました。そのため、やや抽象的な記述になっているところもありますが、その点ご理解いただければと思います。

この拙い文章が、竹内さんそしてレッスンに参加される方々の参考になれば、幸いです。竹内さんにこのような文章を書く機会を与えていただいたことに、深く感謝しています。そして、なによりも、このような体験を与えていただいた竹内さんに、深く深く感謝しております。どんなに感謝しても感謝しき

れないと思うくらいに。

（＊）正確を期すため、いくつかの記号を使った。使用法はおよそ次の通りである。

[]：見出しに付けるなど通常の使い方のほか、（発話ではなく）心の中で思ったことを示すときにも使用した。

「」：通常の使い方をした。つまり、①発話をしめすとき、②〈世間でいわゆる〉という意味、③その言葉を強調するとき、など。

〈 〉：通常の使い方をした。その言葉を強調するときなど。

太 字：強調したいところ。

下 線：竹内さんの言葉で重要な意味を持つものおよび竹内さん独自の言葉遣いに、主として初出のところで、下線を付した。

網掛け：私独自の言葉遣いのところを、主として初出のところで、網掛けにした。

＊、※：注を付けるとき、＊あるいは※を使った。また、[Ⅱ]以降においては、本文にはレッスンで起きたこと・体験したこと（思ったこと、感じたことも含め）を書き、それについての説明・解説・考察は＊以下に書くようにしている。

I は じ め に

(1) からだとことばのレッスン

体験記を読むのに必要なかぎりでは、「からだとことばのレッスン」について、主として竹内さんの『「からだ」と「ことば」のレッスン』（1990）により、私の体験もふまえて、紹介しておこう。

最初に、竹内敏晴さんの簡単なプロフィールを、最近の著書数冊の「著者紹介」を借りて掲げておきたい。

1925年東京に生まれる。東京大学文学部卒。演出家。劇団ぶどうの会、代々木小劇場をへて、1972年竹内演劇研究所を開設。宮城教育大、南山短期大学などで独自の人間教育に携わる。その後、「からだとことばのレッスン」を創造・実践し現在に至る。人と人が出会い、向き合い、直に触れあうこと、そして人が「いのちを生きる」「人間になる」ことの源を探求している。

著書は、『ことばが^{ひら}劈かれるとき』（ちくま文庫）、『劇へーからだのバイエル』（青雲書房）、『「からだ」と「ことば」のレッスン』（講談社現代新書）、『からだ・演劇・教育』（岩波新書）、『癒える力』（晶文社）、『竹内レッスンーライブ・アット・大阪』（春風社）、『声が生まれる』（中公新書）、『生きることのレッスン』（トランスビュー）、『待つしかない、か。二十一世紀身体と哲学』（春風社、木田元氏との対談）ほか多数。

「からだとことばのレッスン」（参加者など竹内さん以外は「竹内レッスン」とも呼ぶ）は、竹内演劇研究所における演劇のレッスンの中から、それに併設される形で生まれてきたものである。『ことばが^{ひら}劈かれるとき』や『劇へーからだのバイエル』を読んだ人々の中から、竹内さんのレッスンを受けたいと希望する人たちが出てきた。ことばがうまくしゃべれないとか、他人との対応がうまくいかず閉じこもってしまうとかいった人々が集まってきたのだ。研究所でその人たちのために、本来の演劇レッスンとは別にレッスンをするようになった。それが次第に「からだとことばのレッスン」へと発展していったのである。

そこでは、人が人に呼びかける、人と人が出会う、直に触れあうとは、そして、人が「いのちを生きる」「人間になる」とはどういうことか。また、そのようなことが実現するには、どのようにすればいいのか、どのように在ればいいのか、からだの次元で具体的に始原的に探求されている。そして、竹内さんは、参加者においてそのようなことが実現するように手助けしている。これが竹内レッスンだといえるだろう。

竹内さんは『「からだ」と「ことば」のレッスン』（「はじめに」）のなかでこのレッスンについて次のように述べている。このレッスンは、「ただ人がひとりひとり自分のからだに気づき、まっすぐに立ち、向かいあい、触れあうことをめざして探ってきた試みであり、いわば、ひとり人間となって^{あど}鮮やかに立つことへと常に歩み出してゆく手がかりにすぎない。」また、「生きもの」と

しての私たちのからだとは、いわばその内を満たして流れ、それを息づかせるいのちとを、よみがえらせようとする試み」である。

竹内レッスンは、様々のワークやレッスンで構成されており、毎年更新され、改変され、発展しているのだから、ここで全貌を伝えるのは難しいし、ここはそれをする場ではない。ここでは、私が参加した最近のレッスンの内容の中から、あとの体験記を読むときの理解に役立つものを紹介しておきたい。それは、ゆらし、呼びかけのレッスン、出会いのレッスンということになる。（なお、言うまでもないことですが、すべて私が現段階で理解している範囲での紹介です。）

・[ゆらし]（同書、3章）

これは野口体操を出発点として、そこから竹内さん独自のものに発展させたワークであるといえる。野口体操は、[生きている人間のからだとは、生きている皮膚^{ひふ}という袋の中に液体的なものがいっぱい入っていて、その中に骨も内臓も浮かんでいる、そういうものである]（野口三千三『原初生命体としての人間』岩波現代文庫、p.12）という認識に立って、その液体に波を生み出すようにからだをゆらすことで、からだが実際に、液体がたばたぼグニャグニャと波打ってゆれている袋になっていく、そのような体操である。

竹内さんの「ゆらし」は、これを二人でやる、一方が他方をゆらし他方はゆらされる、ゆらし・ゆらされ合うというやり方ですところが、一つの眼目であるようだ。

具体的なやり方は、『「からだ」と「ことば」のレッスン』に詳しく書いてあるので、そちらをみていただきたい。ごく簡単に言えば、上半身は、手をとってゆらし、頭は転がすようにゆらす。下半身は足先をもってゆらし、また足を膝の上のせて大根をもむようにゆらす、最後にゆらされる方があぐらの姿勢からダラっと後ろへ倒れかかり、それをゆらし手が胸に抱きとり一緒に呼吸をし二人安らいでいる、などである。

ゆらすといっても、ゆらし手は、相手の身体を、ゆらす対象物として自分の

力でゆらすというやり方ではなく、相手本位で相手（＝液体）の重さで相手がゆれる（＝波うつ）ようにする。ゆらされる方は相手本位に相手にからだを預けて、ゆらされるままになっている、というやり方をする。

すると、二人のゆらし／ゆらされ合いにおいて、ゆらし手の波の流れが相手に流れ込んでいき、逆にそのゆらされる方の波の流れがゆらし手にもどってくる。満身の波の流れが共振していき、からだ＝いのち＝流れが融け合っていくということになる（深いところまでいった場合はであるが。私は原稿執筆時点でまだそこまでいっていない）。

以下、私なりの考えである。人は日常において、職業上必要で認められている場合以外では、家族以外の人に触れたり触れられたりすることがめったにない。家族でもあまりない。隔てた位置から視る／視られるという関係を生きている。そのような人間が竹内レッスンにやってきて、このようなくゆらし／ゆらされ合いをするとうどうなるか。ゆらされる方は、自分のからだをまるごと相手に預けてゆらされるままにするのだから、相手を、自分に触れてどのようにしてもよい存在として全面的に信頼するというをしているのである。ゆらし手は、相手が、自分を、相手に触れていい人とみなしてくれると信じて、相手に触れゆらすのだから、これも相手を信じるということをしているのである。相互に相手が自分を信じることを信じるという入れ子構造の信じ合い、しかもスキンシップ次元での相互信頼が生まれてきているといえるだろう。さらに、最後の〈抱き取られ／抱き取ってーいる〉ことにおいて、抱き取られた方も抱き取った方も、他者と共に今あるがままのからだ＝存在で存在していいんだという深い安心に達しているといえるのではないだろうか。

・[呼びかけのレッスン]（同書、1章）

竹内さんが演劇の演出をしているとき、ある女優が男優に怒鳴るシーンがあったが、声が全然相手に届いていないし、男優も怒鳴られた気がしないことに気づいた。そこで、本当に相手に声を届けるとは、本当に話しかける・呼びかけるとはどういうことか、どうすればいいのかを探りはじめた。これが発展

してこのレッスンに育ってきたのである。

やり方は次のようである。

- 1) 呼びかける人1人と呼びかけられる人、つまり聞き手4～5人を決める。希望で決めることがほとんどである。
- 2) 聞き手は床に坐り、めいめい好きな方向を向き、目をつぶっている。呼びかけ手が2～3m離れたところから聞き手の中で呼びかけたいと感じた一人一人に呼びかける。呼びかける言葉は、呼びかけ手がそのとき呼びかけてみたいなどと思った言葉なら何でもいい。例えば、「こっちへ来て！」あるいは「飲みに行こう！」など。
- 3) 聞き手で「呼びかけられた！」と感じた人は手を挙げる。これが聞き手の課題である。
- 4) その場に立ち会っている人たちの課題はというと、一つは呼びかけ手が誰を目指して呼びかけているかを見ていること、もう一つは呼びかけ手の呼びかけるときの身体や声の様子を見ていること、である。
- 5) やってみると、聞き手が手を挙げること、つまり「自分に呼びかけられた」と感じることはめったにない。そこで、竹内さんが聞き手一人一人にどんなふう^に聞こえ、どんな感じがしたかをたずねる。多くは、「全然呼びかけられていない」「声が自分に届いていない」といった答えである。
- 6) 次に、立ち会っている人に「誰を目指していたか」を尋ねる。「呼びかけようとしている方向は分かるが、2～3人に分散していた」「ひとりごとのようだった」「漠然と全体^{ぼくぜん}に向かって呼びかけていた」といった答えが多い。
- 7) 呼びかけ手に、やってみた手応えと、自分がどんなふう^に呼びかけたか、特に姿勢をおぼえているか、について尋ねる。明確な答えが返ってこないことが多い。
- 8) 最後に、竹内さんがその人の気づいていない身動きを指摘したり真似したりして、自分がどんな呼びかけ方をしていたか気づいていくようにする。

私なりにとらえると。このようにして、このレッスンでは、人が人に呼びか

けるとは本当はどういうことなのかを、こういうことではないことに気づくことを通して探求し気づいていくのである。また、同時に日常ではどういう呼びかけ方をしており、それでなぜ呼びかけたことになっているか、呼びかけたつもりになっているか、にも気づいていくのである。

・[出会いのレッスン] (同書, 5章)

竹内さんが演劇における演技の基本訓練の一つを変形し、発展させて生み出したレッスン。竹内レッスンの柱の一つである。

竹内さんの言葉で言えば、出会いのレッスンは、「ただ、人と人がまっすぐに向かいあうこと、を眼目とする。ひとりひとりが鮮やかに自分であること、を生ききってみることであり、その場に、向かいあうものとしての、「他者」を発見すること、である。いや「他者」として相手の前に立つことだ、と言ってもよい。いわば「共に生きている場」(共生態としてのからだ)から、ひとりの私が改めて立ち現れることなのだ。」

レッスンのやり方は次のようである。

1) レッスン場の真ん中を空けて、参加者は両側に分かれて向かい合って坐る(私が出たレッスンでは、片側だけに坐った)。この空間が、仕切られた「結界」となる。ここに立つものは日常的な気遣いを捨て、いわば魂をむき出しにして曝さらされるのである。

2) 出会いのレッスンを希望した人たちの中から、二人の組み合わせを竹内さんが決める。

3) 二人は5~6m離れて壁に向かって立つ(互いに背中を向けて立つことになる)。心を鎮める。見ている人たちは二人の集中を見守り、場を支える(もちろん、竹内さんが場全体を支えている)。

竹内さんは、二人が始めていい状態になったと感じたとき、「どうぞ」と声をかける。

4) 二人はそれぞれ自分なりに、ある集中が成り立ち、レッスンに踏み込めるな、と手応えを感じたら、振り向いて相手を見る。そして、相手のコーナーの

ほうへ歩き出す（相手へ向かって歩いていくのではない、のに注意）。途中で相手に出会う、あるいはすれ違うことになる。

5) あとはそのとき自分が感じたままに振る舞う。——ふっと、あったかい人だ、近づきたいなど感じたら、寄って手を取るなりすればよいし、イヤな感じがしたら遠ざかればよい。思わず抱き合うことも、平手打ちをくわせてしまうこともあるだろう。とにかくすべてこの場で、「からだ」が感じ動くままに、なにかが起こるにまかせるのである。

6) 最終的には、もうこれでいいと満足したら、あるいは見切りをつけて去って、相手のいたコーナーまで行きそこに落ち着く。とにかく、向こう向きに坐り込んだら、その人にとって「これで終わり」ということになる。両者が探り合いを繰り返し、それ以上発展することもない状態になったら、竹内さんが「そこまで」と声をかけて終わらせる。

7) 二人はしばらく目をつぶり、どんな体験をしたかふりかえる。数分たったら、一人ずつ竹内さんに体験を語る（感想・意見・判断を言うのではない）。

8) 次に、見ていた人たちが、見えたことや感想を言う、あるいは質問をする。

9) 竹内さんは意見を言うことは滅多にない。具体的にそれぞれの行為や姿勢を真似してみせるとか、短いレッスンを別の相手とさせてみる。

まとめると、出会いのレッスンでは、自らのからだをその場に立ちかわせて、そこに起こってくることに自ら立ち会う、「身に起こってくること」を意識が見ている、そして気づいていくのである。自分を検証する作業であるにとどまらず、世界の内に生きること、一人の人が一人の相手と全存在を上げてかわること——拒絶も含めてそれを広い語義によって「愛」と呼ぶこともできよう——その始原の営みである。

なお、私がこのときレッスンに参加した段階で、上で説明したことをどの程度知っていたかという、呼びかけのレッスンのやり方を少し知っていた程度で、後はほとんど何も知らなかったし、分かっていなかった。そういう状態で

レッスンに参加したのである。

(2)

後の体験記を読むのに必要なかぎりでは、このレッスンに参加した当時の私について記しておくとして、私は私立大学に勤務する大学教師（専攻：社会学）。年齢は50代。妻と子どもが二人。

私は10数年前、たまたま本屋の棚で目にとまった竹内さんの『ことばが劈^{ひら}かれるとき』（ちくま文庫、1988年）を読んで、その半生と思想を初めて知った。どちらも衝撃的なくらい驚きに満ちたものであったし、この世の人々の生にとっても、私の生にとっても大変重大なことが書かれているようだと思感した。だが、そのときは内容も意義も深いところまでは咀嚼^{そしゃく}できなかったし、そのころの私の研究テーマがかけ離れていたため、継続して竹内さんの著書を読み進めるといふふうにはならなかった。ただ、私の生の深いところで、ずっ—と気になっていたと思う。

(3) 参加のきっかけ

こういう私が、なぜどのようにして竹内さんの「からだとことばのレッスン」に出ようと思うに至ったのか、その背景と理由はいろいろあるし、私自身気づいていない理由もあるのだろうが、ここには直接的なきっかけを二つ書いておこう。

1) 最近人間関係やコミュニケーションで問題をかかえる学生が増えてきた。「人とつき合うのが苦手」、「コミュニケーションがうまくできない」、「人と親しくなりたいが、親しくつき合える人（友達）がなかなかできない」、「親しくつき合っていると、相手を傷つけたり傷つけられたりすることが多いから、もう人と親しくなりたくない」などといった悩みをかかえて、引きこもりがちになっている。学生を育てて社会に送り出す立場の人間として、何とかしてやれたらという思いが募^つってきた。

〈どうすれば人とうまくつき合えるのか〉〈うまくコミュニケーションがとれるのか〉〈どうすれば友達ができるのか〉〈どうすれば傷つけ合わずに友達でいられるのか〉など、私なりに模索^{もさく}した。しかし、よく考えてみると、自分自身若いときから全く同じ問題を抱えてきており、いまだにそれに悩んでいるのだ。そういう人間に、どうすればいいのか分かるわけがない。それに〈どうすればいいのか〉という問題の前に、そもそも〈人とつき合うとはどういうことか〉、〈いいコミュニケーションとはどういうものか〉〈親しくなるとは、友達であるとは、どういうことか〉、言い換えれば〈人とつながるとはどういうことか〉が、本当のところよく分かっていないのである。

『ことばが^{ひら}劈かれるとき』やその後出版された竹内さんの本を読んでみると、そこに上の疑問に答えるヒントになりそうなのが、いろいろ、しかも具体的に書いてある。例えば、〈人と直^{じか}につながるとはどういうことか〉とか、〈人に本当に呼びかけるとはどういうことか〉など。そして、それは実際にレッスンに出て体験してみなければ分からないことのようにだった。機会をみつけて出てみたいと思った。

2) この頃、講義のときの自分の話し方についても悩んでいた。私はこれまでこんなふうにしてきた。講義ノートを見ながら、一定の内容を、学生へ向けて送り出すようにとうとうとしゃべる。その話がちゃんと学生に届いているかどうか、学生がちゃんと受け取っているかどうかは、あまり気にしていない。それは学生の責任、という話し方であった。ところが、こういうやり方が許されない時代になってきた。少子化のため、私の大学も志願者数が減りはじめ、何もしなくても学生が来てくれるという時代ではなくなった。学生をちゃんと育て、行きたいところに就職させてあげて、大学の評判をよくしなければならなくなった。それには、第一に授業を改善しなければならないということ分かっていた。授業内容がちゃんと学生に届き、学生がしっかり理解するようになければ、そして、そのためには、学生が聴く気になり、学ぼうという気持ちになるような話し方にしなければと思った。しかし、どういう態度でどうい

う話し方をすればいいのか、なかなか分からなかった。

そのころ外部から講師を招いて、集中講義をしてもらうことがあった。講師は、日本におけるコミュニティ・ビジネスおよび社会的起業の草分けの方であり、授業は、少人数の演習形式で、学生たちに実際にコミュニティ・ビジネスを立ち上げる体験をさせるというものであった。授業を見学させてもらったのだが、その方の学生とのコミュニケーションに目を見張った。リラックスし、くだけた、そして暖かい話し方。最初から学生に「さん」や「君」をつけずに呼び捨てで呼びかける、ちょうど兄貴分が可愛い弟分にするような語りかけ方。初対面の先生いきなり呼び捨てで呼びかけられても、学生たちは戸惑ったり反発したりすることもなく、引き込まれて身を乗り出すようにして聴いている。先生が、「はい、山田、司会して案をまとめる！」など呼びかけると、学生は「はい、喜んで」といわんばかりに立って司会をはじめた。ちょうど慕う兄貴の「行くぞ！」の言葉に、「兄貴の行くところには、どこにでもついて行きます！」と二つ返事でついて行くといったふうだ。

学生たちは、ふだん私がそのように呼びかけても（もちろん、もっと紳士的な遠慮した言い方で）、「えー…」と迷惑そうな顔をするだけで動こうともしないのである。また、講義のとき私がかかなり熱心に話していても、全く無反応、無感動なのである。なんという違い。私の対極。私は驚いてしまった。人が人に直に語りかけて、人を動かす、人を変える、人が人に感化される場面を目の当たりにした。感心した。

どうしてこのようになるのか、どうすればこういうことができるのか、知りたかった。知って取り入れようと思った。早合点の私は、呼び捨てがいいのかと思い、早速ゼミで呼び捨てで呼びかけてみた。全然うまくいかなかった。学生は戸惑っているようだった。もう一度その方の授業を見させてもらった。すると、その方は、呼び捨てモードで話しかけるときも、〈大きく相手を包み込んで、相手の心とつないだうえで〉呼びかけているように見えた。しかし、〈相手を包み込む〉というのは、そして〈相手の心とつなぐ〉というのは、どうい

うことなんだ、どうすればいいんだ。私には、とんと分からない領域だった。

竹内さんの本に当たってみると、「本当に声が届いていない」、「本当に呼びかけていない」とか、「相手とつながる」といったことが書いてある。竹内さんのレッスンにできれば、何か具体的なヒントが得られるのではないかと思えた。

以上のようなきっかけで、レッスンに是非出ようと思いつき、インターネットで調べて、手近なレッスンに申し込んだのである（*）。

（*）以上はレッスンに出ようと思ったきっかけである。私が竹内レッスンに出るように導かれた深い理由は、後の記述を読んでいただければお分かりになると思う。

（4）レッスンの一日目

私が驚くべき体験をしたのは、二日目の「出会いのレッスン」のときである。その印象が強くて、それ以外の時間についてはあまり憶えていないのだが、一日目について、印象に残っていることを簡単に記しておこう。

一日目は、最初に皆でたしか「夕焼け小焼け」を歌った。「夕焼け小焼けで日が暮れて 山のお寺の鐘が鳴る お手々つないで皆帰ろう からすとっしょに帰りましょう」と歌いながら、子どものように、他の人たちと手を取り合って弾んでまわった。こういうことをするのは全くの初めてだったので、最初は「大人が子どもように遊ぶのか、他の人たちはよくできるな」と大いに戸惑ったが、何でもやる覚悟で来ていたので、腹を決め一緒になって歌いおどった。子どもに戻ればいいんだな、これも結構楽しいななどのってきた。そのときだ。突然、ぐっと涙ぐんでしまった。ひどく悲しくなった。「あー、こうやって手を取り合って皆で無邪気に遊んだことなんて、僕はたったの一度もなかったな。テレビや映画で子どもにはそういう時代が誰にもあるかのごとく描かれているのを見て、そんなの嘘だと思っていた。よく、「誰々ちゃん、遊びましょ」なんて誘いに來るって言うけど、そんなのいっちょもなかったよ。」こういう思いがどーっと、とめどなく流れ出す。突然の一撃、突然の土

石流だった。涙をこらえるのに苦労した（*この出来事は、(11) [付論] の(1)でふれる幼児体験と関連しているようだ。私の場合、この幼児体験のようなエピソード系が私の基本的なく世界（=他者）了解/存在了解を構成しているようだ。）。

もう一つ憶えているのは、「ゆらし」をしたことだ。この〈ゆらし〉は後述する〈驚きの体験〉に影響を与えたと考えられる。それについては(25)c [素になって立つ] の注に記した。

Ⅱ Aさんとの出会いのレッスン—「私」と世界

(5) 出会いのレッスン

二日目の午後、出会いのレッスンが行われた。

竹内さんが、「レッスンをやりたい人？」と募ったとき、私は手をあげた。是非してみたいと思っていたからだ。ほかに数名が手をあげた。ジャンケンで順番を決めた。竹内さんはこの順番で出会いの相手を決めた（と思う）（*）。つまり、出会いのレッスンは、希望した人としたのではなく、偶然で決まった人としたのである。

（*）この体験記では事実を書くつもりであるが、今となっては記憶が定かでないところもあるので、そういう箇所には、（と思う）と付けることにする。

私は中年の女性とレッスンをすることになった——この方をAさんと呼ぶことにする。順番は、最初だったか、2, 3番目だったかよく憶えていない。私の前に誰かほかの組がやったかもしれないが、記憶に残っていない。それだけ自分のレッスンの印象が強烈だったということだろう。

私は出会いのレッスンに入るとき、出会いのレッスンがどういうものか、何をすればいいのか、よく分かっていなかった。このレッスンに参加する直前に、竹内さんの「からだとことばのレッスン」がどういうものか知っておこうと、『「からだ」と「ことば」のレッスン』を買い、読んでいったのだが、途中

で白紙の状態で見ただけが良かったらとさえ考え直して、後半はサーッと眺めるだけにした。だから、出会いのレッスンを説明したところは、きちんと読んでいなかったのだ。出会いのレッスンが竹内レッスンの一つの柱だということは分かっていた。しかし、出会いのレッスンとは何をやるものなのか、何をすればいいのか、何をしなければならぬのか、そこで何が起きるのか、何も分かっていなかった。

ただ、それが「出会いのレッスン」と呼ばれていることは知っていたのであるから、その「出会い」という言葉から一定のイメージを抱いていたと思う。「出会う」（「出合う」とも書く）という言葉の意味は、広辞苑（第5版）によると、「ゆきあう、でくわす。また、おちあう。会合する。」となっていて、用例として「道で出会う」「困難に出会う」などが載せてある。基本は、「人に出会う」場合で言えば、「人に、予想・期待・予定してでなく偶然に会う」、言い換えれば「人に遭遇する」という意味である。これが一般社会での意味であろう。だが、私が「出会い」という言葉からイメージしていたのは、こういう一般的な意味ではない。竹内さんがマルティン・ブーバーの「出会い」を本の中から取り上げておられた記憶があったのと、私自身も以前からそれに強く惹かれていただったので、「出会いのレッスン」の「出会い」を、マルティン・ブーバーがいうところの「出会い（Begeg-nung）」の意味でとらえていた（例えば植田訳『我と汝・対話』岩波文庫、pp.19-21などを参照）。それは、[〈我とそれ〉という関係でない、〈我と汝〉という関係]であり、[我と汝の直接の関係]である。とは言っても、この〈我と汝〉という関係がどういうものか具体的に書いてないので、漠然と方向が分かるだけでよく分からないのだ。竹内さんの本に書いてある、「ブーバー少年と馬」の例やR.D.レインの「生まれてはじめて紅茶を淹れてもらいました」という例からほんやりとイメージしていただだけである。敢えて言ってみると。人と人が立場をわきまえ・とらわれて、あるいは役柄・役割で、付き合うのではなく、また、鎧よろいや飾りを身にまとったまま付き合うのではなく、そういうものによる隔てが消えている関係。かといって、

酒を飲んで袴かみしも 脱ぎ捨てて「本音」で付き合うというのでも、甘えあってべたっとくっつくというのでもない関係。こういうものではない、という言い方を重ねるしかないのであるが、竹内さんがいろいろ書かれていることを参考にして考えて、敢えてポジティブに言うなら、この関係は、そういうものによる隔へだてが消え、いまここで人そのものと人そのものが向き合い、直に触れあい、つながり合うことにおいて生まれてくる関係という方向にある関係、だが具体的には全然分からないので、模索するしかない関係である、という程度の理解をこのときはしていたと思う。

というようなわけで、私はこのとき「出会いのレッスン」を、漠然とブーバーのいう「出会い」つまり〈我と汝〉の関係のレッスン、言い換えれば、さまざまなものによる隔てが消え、いまここで人そのものと人そのものが向き合い・直に触れあい・つながるという方向の関係のレッスンとイメージしていたと思う。そして、そういう関係になれることを目指すレッスンではないかと、うっすらと考えていたような気がする。だからといって、私自身がそういう関係になることを目指してレッスンに入ったというわけではない。そういう関係がどういうものかよく分かっていないわけだし、分かってても極限的に遠い目標であるから、目指しようもない。ただ、上であげたような様々の隔てがなくなり、その人そのものと親しくいる関係になれたらいいなという程度のものはぼんやりと目指していたと思う。

竹内さんがレッスンについて簡単に説明された。それを私は次のように受け取った（このとき注意深く聴いていなかったのので、正確には聞き取れなかった）。

「振り向いて、相手を見て、感じるままに動いてください」、「寄りたかったら寄っていき、寄りたくなかったら、すれちがって離れていけばよい。」「これ以上関係が進展しない状態になったら、向こうまで歩いていき、向こう向きに座ればいい」（*）。

私は言われたとおり、とにかく[感じるままに動けばいいんだ]と考えてレッ

スンに入ったのである。

(*) [聞き違い]

この体験記の草稿を竹内さんに読んでいただいところ、私の受け取ったやり方の「振り向いて、相手を見て、感じるままに動いてください」という箇所が、竹内さんが実際に言われた言葉と少々違うということを教えていただいた。竹内さんはこのとき（いつもと同じように）、次のように言われたそうである。

「振り向いて（新しい世界にはいってゆき）まっすぐむこうまで歩いてください。そして、途中でむこうからくる人に気づいたら、感じるままに動いてください。」

私の受け取ったやり方とどこが違うかという点、一つは、私の中では、振り向いて相手が見えた段階から感じるままに動くことになるのに対して、竹内さんの中では、歩いていって途中で人に遭遇した段階から感じるままに動くことになる点である。もう一つは、私の中では、「まっすぐむこうまで歩く」というやり方が頭に入っていない点である。

ここで問題は、私の聞き違いによって生じたやり方の違いが、あとのレッスンの展開に影響をもたらしていないかどうかである。検討しておきたい。

結論を言えば、どちらのやり方でも、レッスンのその後の展開にほとんど違いはなかったのではないと思われる。私は出会いのレッスンを二、三度体験しているが、その体験から考えるとそう思えるのである。

1) どの段階で人に気づき（＝遭遇し）感じるままに動き出すかという点の違いについて。

私の体験では、まず、10m 離れて人と対して互いに見合うということ自体ですでに、日常慣れぬ世界、ときに異様な世界（＝新しい世界）に入ったと感じる。またさらに、振り返った段階ですでに、相手がレッスンに入る前とは違う、見慣れぬ、ときに異様な人に見えることがある。この場合は、竹内さんのやり方の歩いていって途中で人と遭遇するということが、最初から起こっているといえる。

また、振り返って見た段階では相手がよく見えないことがある。そのときはよく見えるところまで近づくことになる。そこでやはり見慣れぬ、ときに異様な人に見える、すなわち人に遭遇する。これは竹内さんのやり方での展開と同じだと言える。このように、私の受け取ったやり方でも、人に遭遇しそれから感じるままに動くことになるから、竹内さんやり方の場合と展開は同じであろうと考えられる。

2) 竹内さんの「まっすぐむこうまで歩いてください」（つまり、相手の方へでなく、相手のいた壁の方へ歩いていってください）という言葉が頭に入っていなかったことが、展開に違いをもたらしたかどうか。

記憶を振り返ってみると、この言葉は記憶に残っていない。しかし、「相手のほうへ歩いて行ってください」という言葉が残っているかという点、それもない。かすかに「相

手の方角で、相手とすれちがう感じのほうへ歩いていく」といったようなことが残っているような気がする。とにかく、〈向こうのほう（向こうの壁のほう）へ歩いていく〉というやり方は頭になかったから、振り返って、これから報告する最初のAさんの場合も次のBさんの場合も、振り返って相手を見た時点で、近寄れたらいいな、あるいは近寄りたいたいと感じたから、相手のほうへ近づいて行ったのである。私の場合、出会いのレッスンでは、どうしても「近寄れたらいいな—でも近寄れるだろうか／近寄ってくれたらいいな—でも近寄ってくれるだろうか」ということがレッスンのテーマ（その場で切実に感じる生の主題・課題）として出てきてしまうのである。また、このように感じたのは、もともと「出会いのレッスン」を漠然とブーバー的な「出会い」のレッスンととらえ、「出会いのレッスン」で、ブーバー的な「出会い」は土台無理にしても、〈様々の隔てがなくなり、その人そのものと親しくいる関係になれたらいいな〉とほんやりと思っていたからでもあったであろう。

これが、〈向こうのほうへ歩いていく〉というやり方を頭にもっていたらどうなっていたらだろう。おそらく、向こうの方へ歩いていき、途中で見慣れぬ、異様な人に遭遇するだろう。でもその場合でも、近寄れたらいいなあと感じるだろうから、相手の方へ近寄って行って、また人に遭遇し、あとは感じるままに動いたらだろう。つまり、後述するような実際の場合と展開は肝腎^{かんじん}のところでは同じになっていたであろう。

結局、実際の展開では、私の聞き違いは肝腎のところでは違いをもたらしなかったであろうと思われるのである。

(6)

レッスンの行われる部屋の南側に見守る側の参加者が10数名座っており、竹内さんがその真ん中に椅子に腰掛けていた。

私は西側の、Aさんは東側の壁に向かって、立った。ということは、互いに背を向けた状態で立ったのである。

竹内さんの「どうぞ」という声をした。私は、しばらくして振り向いて(*), Aさんのほうを向いた。

(*) [集中]

竹内さんは、レッスンに入る前の説明で、「集中ができれば、振り向いてレッスンに入ってください」と言われたはずである（この会以降、私が経験した出会いのレッスンでは、必ずそう言われているから）。しかし、このとき私はそれを憶えていない。おそらく、私の耳には入ったが、〈集中ができれば〉ということがよく理解できなかったので、

素通りしてしまったのだろう。というわけで、私はこのとき、[自分なりに集中ができた] と思ったから振り向いたのではなく、適当なところで [相手も振り向いただろうし、そろそろ振り向かないとまずいかな] と思って振り向いたのである。

(7)

Aさんの姿が見えた。すると、次のような思い・考えが出てきた。

[私にとって、話しかけにくい、近寄りがたい人だな。でも、中年のおじさんおばさん同士という感じで話せば、話せないこともないかもしれない。]

(*)

(*) なぜ、どのようにしてこのような考えが湧いてきたのか、解説しておく。

私はAさんを前日初めて見た。朝、会場に着いて、部屋に入り、北東の隅に座っていると、近くにAさんが座っておられ、30代くらいの男性と、以前からの知り合いといった感じで、雑談をしておられた。Aさんは気取らない気さくな感じの人だったが、他方で顔が硬く緊張しているようにみえた。私は、話しかけにくい人だなあという印象もった。また、話しぶりやからだ全体の雰囲気から、私は、事務の仕事というより、現場で作業をしたり作業を指揮したりといった仕事をされてきた方のように判断した。私は、専らデスクワークをしている大学教員という自分もなんとなく意識して、そういう自分では話しかけにくいとも感じていたのだと思う。結局、そのときはAさんとは話さなかった。

その日（一日目）の夜、懇親会があったのだが、たまたま私は、Aさんの隣に座った。懇親会の席でもあり、日中のレッスンのときの肩の荷もおり、若干袴をぬいで、ただの中年のおじさんという気分、中年のおじさんおばさん同士という雰囲気で、Aさんと話してみると、結構話せた。少しほっとした。

このようなことがあったので、レッスンのとき上で書いたような思いや考えが湧いてきたのだと思う。

(8)

近寄りたいたいとも近寄れるとも思わなかったが、近寄れたらいいなとは思ったので、とにかく [自然体で行けばなんとかなるだろう] と思って、肩をダラッと脱力し、身体(*)をリラックスさせて(**)、Aさんの方へ歩いていった。

(*) 身体：人間を「身体」と「心」とに分けて二元的にとらえるのとらえ方（デカルト的のとらえ方）に立って、その「身体」のほうを指すとき，“身体”という言葉を使うことにする。人間存在を、「身体」と「心」とに分けず、身心一元の存在全体をくからだとしてとらえる竹内さんのとらえ方に立つときは、平仮名の“からだ”という言葉を使うことにしよう。

(***) [身構え]

なぜ私は、このようにわざわざく肩の力を抜きリラックスして、歩いていったのか。私は、家の外に出ると、つまり、他人たちがいる空間に出ると、自然と肩が上がり緊張しているのだ。ときどき気づいて、肩をダランとさせるのだが、いつのまにかまた肩を緊張させている。これは、竹内さんがよく言われる、身に付いてしまった、無意識のうちにしてしまう、身構えだろう。この身構えには、私といういのち=存在がそこで生きている・生きていかなければならない世間において、何かに対して、また何かに向かって、とっている／とらされているいのち=存在の姿勢が現れているだろう（後述の言葉では、日常世間的自我=身体（※））。一体、何が現れているのか。私が生きてきた世界や人生をふりかえると、いくつか考えられる。①ありうる他人たちからの攻撃に対して、鎧を付けて身を守ろうとしているのだろう。それは同時に、強固な防御の体勢を見せる、つまり、武威を示すことで、潜在的な他者の攻撃意志を挫こうとしているのだろう（私にとって、一般に他者たちがなぜかくも潜在的に非好意的な存在としてあるのかについては、後述する）。②他者たちに対して、無意識裏に自分は偉いんだということを示そうとしている。③「格好よく」見せようとしている。④いつも何かしなければいけない、かくあらねばならないという切迫感があり、それへ向かって前のめりで突っ込んでいくようにしている。

10年ほど前、もっと「自然体」で生きたほうがいいのではないかと思ひ、人と接するときは努めてリラックスするようにしているのだ（「努めてリラックスする」というのもなんだかオカシイが）。

(※) 日常世間的自我：私の造語。人は、世間からの要求に反応し応えようとし／脅威に備え対抗しようとして、また自分のうちに取り込んだ世間的欲望に突き動かされて、日常世間的自我へと成形され／自己形成していると考えられる。そのようなあり方をとりあえずく日常世間的自我と呼んでおきたい。ほかに適切な表現があるかもしれないが。なお、この用語については、²⁵c[素になって立つ]、⁽³⁴⁾[木]や[空]の注(*)も参考にさせていただきたい。

Aさんとのレッスンの体験とそれについての省察の途中であるが、紙数も尽

きたので，続きは，次論文に譲ることとしたい。

なお，本論文は2009年度特別研究助成によるものである。記して謝意を表したい。

参 考 文 献

- 竹内俊晴，1988，『ことばが劈かれるとき』，筑摩書房
1990，『「からだ」と「ことば」のレッスン』，講談社